大宰府アカデミー・令和編　第2期　第6講　令和8年9月16日(水)質問及び回答(Q&A)

「　太宰府の経塚　」
講師・回答:　小田　富士雄先生(福岡大学名誉教授)

この度は大宰府アカデミー・令和編 第2期を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q1／　経筒が雨乞いのために掘り出されて、再利用された事例があるというお話しがありました。元々、経筒は後に掘り出されることを想定していたのでしょうか。あるいは未来永劫掘り出されないように埋められたのでしょうか。

A／　回答

末法思想が平安時代後期以後、源平の対立抗争などに代表されるような社会不安情勢の蔓延とあいまって流行してきました。法華経にみえる仏滅後 56 億 7 千万年の後に、天から弥勒菩薩が下降してきて、経塚に埋蔵していた法華経を掘り出し護持する者たちを救ってくれると信じて経塚を営造しました。

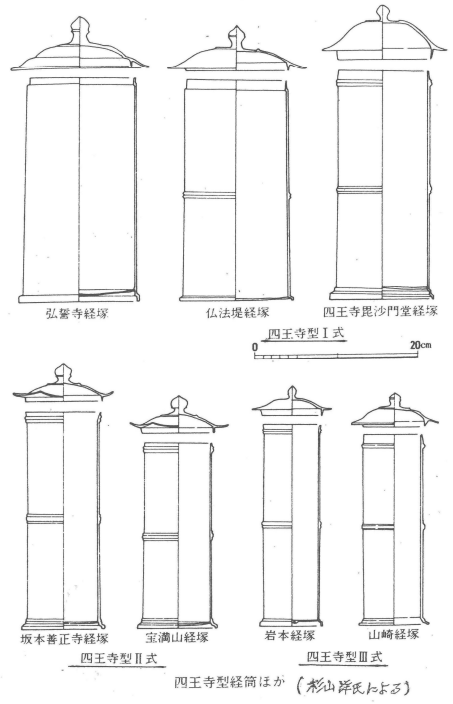
しかし、亡き父母への供養や自身の逆修供養などが加わってくると将来掘り出されることまでは予期されなかったと考えられます。

Q2／　四王寺型経筒の特徴を教えて下さい。

A／　回答

杉山洋氏は、「四王寺型経筒」の設定として、以下のような特徴をあげています。

(イ)　筒身部の3ヶ所に突帯がある(最大の特徴)。
(ロ)　筒身の最下段(高台)が横に張り出し、台形に近い形状となる。
(ハ)　蓋には宝珠形の鈕がつく。
(ニ)　蓋の鈕の部分(頂部)に突帯を一条めぐらす。
(ホ)　蓋が筒身から大きく張り出し、その先端部に小孔をあけ、ガラス小玉を吊り下げる(瓔珞)ものもある。



以上の5点が四王寺型経筒の特徴ですが、時代の変遷によって多少の変化があり、また退化して形の崩れたものもあり、必ずしも以上の特徴をすべて有しているわけではありません。

ただ、この杉山氏の設定は、実物にあたってみると、その変化の形態も含めて、判別しがたいことも少なくないことから、私はあまり使用していません。

Q3／ 末法思想と経筒の関係について教えて下さい。まず末法思想があって、あとから経筒が盛んにつくられたように感じられますが、経筒がすぐに作られなかった背景には何が考えられるでしょうか。また、経筒がつくられるようになった背景として、末法思想以外に何か考えられるでしょうか。

A／ 回答

天台宗系宗旨を信奉する貴族クラスや僧侶たちの世界では、末法到来以前から法華経とともに自身の毛髪などを延暦寺関係の堂宇などに奉納する風がありました。

一方、末法思想が高揚してくると、さらに弥勒下生の将来を期して、地中に埋納しておく風が起こり、経塚が営造されるようになりました。

末法到来説は天台宗系の僧侶たちによって説かれ、これが次第に社会全体の底流として広まってくるのは 12 世紀前半代であり、九州においても同じ傾向がみられます。

なお、末法到来第1年は後冷泉天皇の永承7年(1052)とすること諸説とも一致しています(『帝王編年記』ほか)。

Q4／ 経塚に埋納された経典はなぜ法華経なのでしょうか。ほかの経典は見つかっていないのでしょうか。

A／ 回答

法華経八巻のなかで末法思想を説き、弥勒菩薩が天から下生してきて仏法を説いて聴衆を救うことが記されています。また法華経は天台宗が奉ずる経典でもあるところから、地下に埋納する経塚営造も主として天台宗僧侶たちの関係することが多かったのです。

しかし、一般的な日常生活では他の宗教経典を信奉することも少なくありませんでした。

Q5／ 一字一石経塚についてお尋ねします。資料に「江戸期に全盛」とありました。たとえば、江戸中期、享保の大飢饉の際、大量の餓死者が出て個々の埋葬が叶わず、多くの遺体を合葬した場所に供養塔を建て、一字一石経を埋納したということがあります(糸島市二丈地区など)。これも一種の経塚と考えてもよろしいでしょうか。これは資料にあった経塚の造営理由の3番目の例「縁者の追善供養」に当たりますでしょうか。

A／ 回答

一字一石経塚の概要については、配布資料の2枚目「北部九州の経塚」中の埋経の形態と1枚目の「経塚概説」中の経塚の終末に書いておいたとおりです。

個々の事例では糸島市の事例などをあげておられますが、江戸時代には筑後や豊前地域でも同様な饑饉に際して一字一石経塚を造成した事例が調査されています。また埋納した上に石碑や石塔を建てた事例もあります。福岡市の西部地域で石塔を建立し、これを囲むように地上に一石経石群を配置した例があるとも聞いています。

また各地で出版されている市町村史などを点検すると、一字一石遺構についてふれているものも少なくありません。

近くは昭和時代に造成された供養石碑まであるようです。